



編集発行 南薩地域振興局農林水産部農政普及課
南薩地域振興局農林水産部農政普及課指宿市十二町駐在

TEL 0993-52-1359
TEL 0993-22-6422

「第27回全国農業担い手サミットinかごしま」

令和7年10月23～24日、本県で標記大会が初めて開催され県内6か所に分散して情報交換会と現地研修会が開催されました。南薩地域では「温暖な気候と豊かな大地，水の恵みを生かし持続可能な農業に挑戦を続ける“南薩地域”」をテーマに開催されました。

(1) 情報交換会

南薩地域では指宿市と枕崎市の2会場で情報交換会を開催し，ウェルカムティを提供するなど，県外参加者との交流を図りました。



「東洋のハワイ」と呼ばれる指宿ではフラダンスで歓迎【指宿】



焼酎の「鏡割り」で乾杯【枕崎】

(2) 現地研修会

管内4市6コースに分かれ現地研修を実施し，地域の取り組みを紹介しました。



研修先では熱心に質疑応答



参加者みんなで「急須と湯呑のモニュメント前」で記念撮影

(3) まとめ

本サミットを通じて地元参加者も全国の農業者と交流が図れ，お互い大きな刺激となり，今後の農業経営や地域振興に活かせる学びが得られたことと思います。

チャ耐病性品種を用いた幼木期の有機栽培転換時期

1 はじめに

本県では、茶における有機栽培の取り組みが増加し、南薩地域でも有機栽培面積が増えつつあります。

しかし、茶の幼木管理において、定植後から有機栽培をすると、初期生育が劣り、成園化後の生育にも影響を及ぼす懸念があります。

また、雑草対策に多くの労力を必要とします。茶における幼木期は約4～6年必要であり、幼木期の一部期間を慣行栽培で管理することが、初期生育の確保、除草作業の労力削減につながる可能性があります。

そこで、農業開発総合センター茶業部の「耐病性品種を用いた幼木期の有機栽培転換時期」に関する研究成果を紹介します。

2 新技術の内容

主要病害に抵抗性のある「さえあかり」で試験されました。

(1) うね間の除草時間

定植1年目から有機栽培を開始すると除草時間は、慣行の除草剤散布に比べると大幅な増加となります(図1)。有機JAS法では茶の有機転換期間が3年必要なため、定植4年目から受けることができます。

定植1年目は除草剤を使用し、定植2年目から有機栽培へ転換し刈払機で除草作業をすると、1年目から有機栽培するよりも除草時間は大幅に短縮することができます(図1)。有機JAS認定は定植5年目から受けることができます。

定植3年目から有機栽培へ転換すると、1、2年目の慣行の除草剤散布により雑草量は少なく除草時間は短くなります(図1)。しかし、有機JAS認定を受けられるのは定植6年目からとなります。

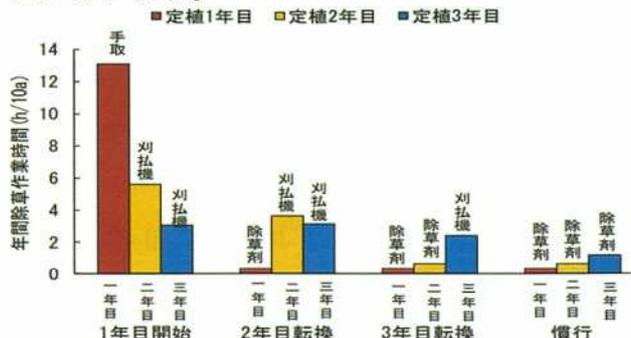


図1 有機転換年別の年間のうね間除草時間

注1) 有機転換1年目は手取、2、3年目は刈払機使用

(2) 茶樹生育

耐病性品種を用いて有機栽培し、定植1～3年目の秋季に茶樹の樹高や株張り、秋整枝量について調査したところ慣行栽培と差はありませんでした(表1)。

表1 有機転換年別の秋季の茶樹生育

有機転換年	定植1年目			定植2年目		定植3年目	
	生存率 (%)	樹高 (cm)	株張り (cm)	樹高 (cm)	株張り (cm)	秋整枝量 (kg/10a)	株張り (cm)
1年目	100	65.4	36.5	104.9	62.3	422	119.7
2年目	-	-	-	107.8	65.0	454	114.0
3年目	-	-	-	-	-	394	115.0
慣行	100	64.4	38.7	107.7	69.4	514	120.0
分散分析	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns

注1) 調査は1年目は9月、2、3年目は10月

2) nsは有意差なし

(3) 留意点等

【耐病性品種】

鹿児島県の奨励品種と新品種について主要病害の耐病性についてまとめています(表2)。有機栽培を開始する際の参考にしてください。

【害虫多発の場合】

害虫が多発し、茶樹生育に影響を及ぼす恐れのあるときは、有機JAS適合資材を活用してください。

表2 耐病性品種

主要病害の耐病性品種	樹勢	炭疽病	輪斑病
奨励品種			
ゆたかみどり	強	強	中
あさのか	強	中	強
はるもえぎ	やや強	中	強
かなやみどり	強	やや強	やや強
新品種			
なんめい	やや強	中	強
せいめい	やや強	中	強
さえあかり	強	やや強	強
かなえまる	やや強	やや強	強

3 さいごに

耐病性品種を用い、定植1年目は慣行栽培とし、2年目以降、有機栽培に転換することで除草時間の短縮と初期生育を確保できます。

外付け自動操舵システムの導入効果について

12月4日、トラクターの自動操舵による作業改善の効果や可変施肥について調査を行いました。

①作業負担軽減について

作業姿勢が身体に与える負荷を客観的・定量的に評価するエルゴノミクス（人間工学）手法であるOWAS法を用いて、システム導入前後の姿勢改善の調査を行いました。前進バックによるプラウ耕作業の場合、導入前は作業時間の50%で姿勢の改善が必要な状態でしたが、自動操舵導入後は問題ない姿勢に改善されました（図1）。

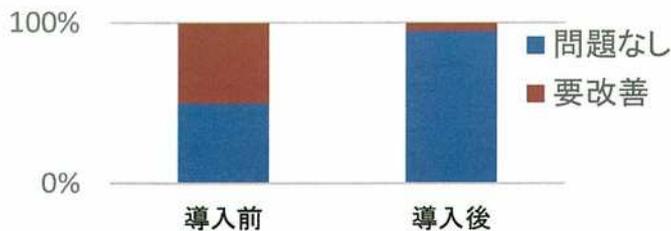


図1 作業姿勢改善効果

また、夜間作業や作業幅の視認が難しい等、より集中力が必要なハンドル操作を行う作業において、目や首の疲労の軽減効果が大きいことが分かりました（データ略）。

②可変施肥への対応について

衛星センシングとブロードキャスターを連動させることで圃場内の生育差や地力に応じて施肥（可変施肥）を行うことが可能になり、収量の安定化や肥料費の節減効果が期待できます。



可変施肥実証検討会の様子



可変施肥マップ

生育や地力に応じてマップを作成し、色が濃い(生育が良くない)場所に肥料を多く散布

AGRI倶楽部指宿と指導農業士等による勉強会

11月25日、農業青年クラブAGRI倶楽部指宿と指導農業士、農業経営者クラブとの勉強会を開催しました。目的は「先輩農業者の経験から学ぶ」とし、日ごろの悩みを青年が質問し、指導農業士等が回答する形で進めました。今回の質問は以下の4点。

- 1 技術の早期習得のために必要なこと
- 2 経営規模拡大について
- 3 農業のワークライフバランス
- 4 稼げる農業にするために



質問を受けた指導農業士からは「農作業は段取りが最も大事」「規模拡大は小面積を確実に管理することから」など、経験に基づいた価値あるアドバイスが送られました。また、女性クラブ員からの「農作業と家事とのバランス」の質問には、答えにくそうな場面もありましたが、終始和やかな勉強会となりました。



青年からは、より具体的な情報を求める意見もあり、経営内容の多様化で開催方法の工夫も必要ですが、営農経験を次世代につなぐ取り組みは、地域農業の振興のためにも重要で、研修会だけでなく普段から相談しやすい関係性を構築することが求められます。

たんかんのリュウキュウミカンサビダニ対策

1 はじめに

たんかんの外観阻害の主要因として、リュウキュウミカンサビダニによる被害があります。

大きさは体長が約0.16mm程度の極めて微小な害虫で、近年、南薩地域でも被害が増え、問題となっています。



被害果 リュウキュウミカンサビダニ

2 被害状況

吸汁加害により果皮は、梅雨明け頃では灰褐色のサメ肌状、秋季～冬季では赤～黒褐色となり、外観が著しく悪くなります。秋(10月)以降に多発生し、冬季にも加害し続けます。

3 対策

- (1) 適期(5月、梅雨明け以降、夏場)に効果のある薬剤(サンマイト水和剤等)散布で密度を低下させることが大切で、防除が遅れると秋季に大発生します。
- (2) 散布効果をあげる樹形改造、密植園の解消が重要です。(図1)

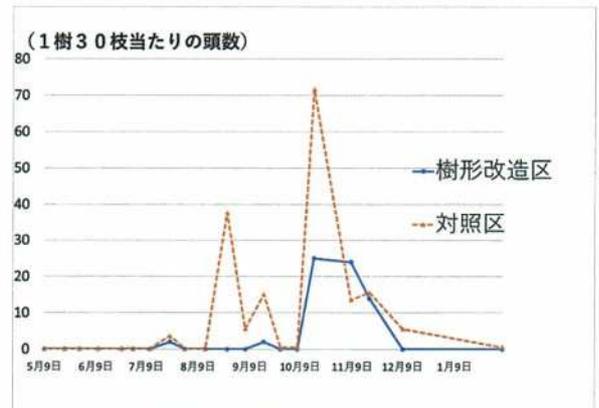


図1 樹形改造区と対照区との発生数の比較 (令和6年度調査)

- (3) 薬剤は十分量を、丁寧に散布してください。

WCS用稲専用品種「つきすずか」実証結果

1 目的

南九州市の水田では、ブロックローテーション(転作するブロックを3年おきに変える)実施による申し合わせで、主に肉用牛の自給粗飼料として生産されるWCS用稲は、漏生籾による雑草化の心配が少ない主食用米品種での栽培となっています。

しかし、専用品種と比較して、収量が低く、牛の消化性が悪い籾が多いことが利用農家にとって課題となっているので、籾数が少なく、増収が期待できる専用品種「つきすずか」の栽培・利用の可能性を検討するために実証を行いました。

2 実証概要及び調査内容

	実証区「つきすずか」 WCS用稲専用品種	対照区「あきのそら」 主食用米品種
施肥量 イネリッチ	100kg/10a N量: 12kg/10a程度	60kg/10a N量: 7.2kg/10a程度
播種日	5月27日	
田植日	6月16日	6月28日
調査項目	草丈、穂長、籾数、生草収量、 1株重量、乾物収量、乾物率、 成分・発酵品質、牛の嗜好性等	

3 結果と考察

	実証区「つきすずか」 WCS用稲専用品種	対照区「あきのそら」 主食用米品種
出穂時期	8月29日	9月15日
収穫時草丈 (cm)	148	97
穂1本当たりの籾数	39	92
乾物重量 (kg/10a)	1,693	1,289

「つきすずか」は主食用米比で、草丈が約50cm高く、乾物収量が124%増収、籾数が半分、製品の牛の嗜好性もよく、給与粗飼料としての利用メリットが確認できました。

次年度は、雑草化の確認と対策などに取り組む予定です。



写真1 左つきすずか
右あきのそら

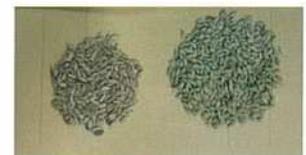


写真2 籾 左つきすずか
右あきのそら



写真3 牛の嗜好性調査